公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団
JR-West Relief Foundation

第4回連続講座 『いのち』を考える

生きることの苦悩と喜び

❶ 10月4日(金)

徳永　進　野の花診療所院長

いのちのあと

いのちが始まる。いのちが生きてく。いのちが暮らす。いのちが終わる。終わるが消えないと思える。いのちのことを考えてみたり、と思います。

❷ 10月11日(金)

大西　秀樹　埼玉医科大学国際医療センター 精神腫瘍科教授

「遺族外来」から見つめるいのち

死別は人生最大のストレスで心身に様々な影響を及ぼしますが、医療機関での遺族ケアは行われていないのが現状です。私共の病院では「遺族外来」を設けて診察を続けてきました。遺族の診察を行う中で見えてきた「いのち」についてお伝えしたいと思います。

❸ 10月18日(金)

香山　リカ　精神科医、立教大学教授

「いのちの選択」がもたらすもの

最近の医療の発展はすさまじく、私たちはごく簡単な検査で「妊娠した赤ちゃんの障害の有無」や「自分が将来、がんになる確率」なども知ることができるようになりました。しかしそれは同時に、私たちに「いのちの選択」という重い課題を突きつけています。この最先端医療時代を私たちはどう生きるべきかについて考えてみたいと思います。

❹ 10月25日(金)

坂下　裕子　こども遺族の会「小さないのち」代表

遺族の「意味づける」ちから

深い悲しみのただ中にあるご遺族と出会い、語らい、共に歩むことが私の暮らしです。その方々は、それでもなお生きようと考えた理由をのちに教えてくださいます。人間の、どんなところからでも生きることのできる可能性についてお話ししたいと思います。

❺ 11月1日(金)

柏木　雄次郎　関西福祉科学大学教授、日本緩和医療学会理事

緩和ケアでの出会いと別れ

緩和ケアの臨床現場で、患者・家族との様々な出会いと別れを経験しました。それらの出会いと別れから、教科書などでは得られない多くの事を学ぶことができました。その幾つかをお示しして、患者・家族に寄り添うということについてお話したいと思います。

❻ 11月8日(金)

入佐　明美　ボランティア、ケースワーカー

日雇い労働者のいのちと出会って

日雇い労働者の街"釜ヶ崎"でボランティア、ケースワーカーとして働いてきました。結核にかかった人、路上で死亡する人などに出会いました。繁栄の裏で多くの"いのち"が犠牲になり、私たちの生活を支えていることを知りました。

❼ 11月15日(金)

葉　祥明　絵本作家、画家、詩人

芸術が人生に教えてくれること

人生には時として、自分の理解を超えた重大な出来事が起こります。そんなとき人は、その苦しみや悲しみのなかで必死になって、その原因を探し求めます「なぜ?」「どうして?」と。それは、いつか自分という人間の存在に関わる哲学的とも言える深みにまで達するのです。

❽ 11月22日(金)

市原　美穂　特定非営利活動法人 ホームホスピス宮崎理事長

暮らしの中で死に逝くこと ～かあさんの家の実践から～

地域の空いている民家を借り、5人が共に暮らす居場所をつくりました。「かあさんの家」は、病気や障害があっても、最後まで生活することを支えています。人は必ず死を覚悟する時があり、そして死を見据えることで生の輝く時間があると思っています。ホームホスピスの実践から、暮らしの中で死に逝くことをお話しします。

❾ 11月29日(金)

カール・ベッカー　京都大学こころの未来研究センター教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授

高齢者の生き方と選択を考える

日本人は世界に誇るべき伝統的死生観を保持してきました。数十年前までは、在宅での往生を期待出来ましたが、医療技術の発展に伴い、寿命は世界一まで長引いた反面、多くの患者が消毒された病棟での末期を迎えます。急変する高齢化社会をどう生き抜くかを一緒に考えたいと思います。

❿ 12月6日(金)

髙木　慶子　上智大学特任教授、上智大学グリーフケア研究所特任所長

悲嘆力

一般的に「悲嘆」への理解は、マイナスイメージで受け止められる場合が多いと思いますが、悲嘆の感情が持つ力、つまりそのエネルギーの大きさを考えてみたいと思います。悲嘆感情がプラスに働く時の積極的なエネルギーについてご一緒に考えてみたいと思います。